

# ドキュメント 進路指導

2

## VOICE U M

**先生** この間テレビで遠藤周作の『深い河』をテーマにしたドキュメンタリーを放映していましたが、ご覧になりましたか？

1人の生徒が真瀬先生にそう話しかけてきたとき、真瀬先生は「おっ」という軽い驚きを感じつつ、その言葉を受け止めていた。真瀬先生は国語担当だが、ずいぶん長い間、生徒たちと文学談義をしたことがなかった。だが今、生徒が自分から文学の話題を持ちかけてきている。真瀬先生は、生徒と遠藤周作の作品について語り合いながら、「もしかしたら小論文指導の効果が見れたのかな」と考えていた。

「こんなこともあった。古典の授業が終わると生徒の何人かは真瀬先生のところへ質問に来る。その多くは文法や口語訳に関するものなのだが1人だけ『源氏物語』の紫の上つて美人だっただんですか？」とやってきた生徒がいた。「さあ、わからないなあ」と答えながら、真瀬先生はうれしくなった。もちろん、紫の上が美人である

かどうかは、入試には関係ない。しかし生徒が古典を文法や単語を覚えるだけのものとしてではなく、作品の内容にまで踏み込んで想像を働かせようとしている点が新鮮だった。「これも小論文指導がきっかけかもしれない」と、真瀬先生は感じていた。

最近の高校生は読書量が不足しており、またコミュニケーション能力が低下している。よく指摘されることではあるが、真瀬先生自身もそう感じる人が多いという。真瀬先生は長い間山岳部の顧問を務めており、かつてはよく生徒と1つ1つに山に登った。天候が悪いと1日中テントで停滞することになるのだが、そんなとき以前なら生徒同士がいるんなことをテーマによく議論を交わしていた。それが10年ぐらいい前から、お互いが背中を向けて漫画を読むようになってしまったという。本も読まず、他者と向かい合っさつかけもなまま彼らは育っている。と真瀬先生は考える。

「そついつ他者とのかわりが少なくなってきた。生徒たちに対しては、小論文が効果があると思っんです。本校の小論文指導の目的は基本的には入試対策です。しかし副次的な効果も予想以上に大きい。つまり、ものを書くためには深く考えなくてはいけません。そのためには他者の言葉に耳を傾けたり、情報収集をするために読書も必要となります。小論文指導を通して、生徒たちは社会的問題や文学作品に興味を持つようになり、発想も少しずつではありませんが豊かになっています。私はそこに着眼して

# 小論文指導の 活用で生徒の 進路観を育成する

埼玉県立不動岡高校 長崎県立長崎北高校

埼玉県立  
不動岡高校

# 全教科の教師が 協力して全校挙げての 小論文指導を開始



いるんです」

**小論文指導に** 真瀬先生が関心を持つようになったのは、今から5年前の93年、社会科のS先生が小論文指導を始めたのがきっかけである。それまでも真瀬先生は、小論文を書かせることが生徒の創造性や論理的思考力を伸ばすついでで有効であることに気がついてはいた。だが実際の指導は、推薦入試や国立大の後期試験などで小論文を必要としている生徒に対する、個人指導のレベルを超えてはいなかった。

「そんなときにS先生がやってこられた。その言葉に耳を傾けることが生徒に求められる小論文指導。その添削は教師と生徒のコミュニケーションの場にも発展する。」

国公立大の後期日程入試を中心に、大学入試における小論文試験の重要性が高まっている。しかし最近、小論文指導を進路指導のプログラムに組み込んで生徒の進路観の養成に役立てている高校も出てきた。変わりつつある小論文指導の取り組み事例を紹介する。



埼玉県立不動岡高校  
**真瀬信光** Maeno Nobumasa  
昭和14年栃木県生まれ。  
国語科担当。  
平成9年度進路指導主事。  
草加高校、鷲宮高校などを経て  
不動岡高校に赴任し、9年目。

れて、私と意見が一致したんです。彼は一種のカリスマ的な人気を生徒から得ていた先生で、多いときには120人ぐらいいの生徒の小論文指導を引き受けていたはず。小論文指導は、生徒の書いてきた文章を添削するというのが基本なのですが、彼の生徒に対するアドバイスは非常に的確でした。添削は、私たちが小論文指導をやっていくうえで一番難しいところなんです。小論文はほかの科目と違い、答えがありません。私たちも添削をしているうちに、本当にこれでいいんだろうか、独りよがりなんじゃないだろうかという不安が頭をもたげてるものなんです。その点、S先生の添削は説得力があるというか、我々が読んでもなるほどと思うものでした。勉強になりました」

取り組みに共鳴した真瀬先生は95年、進路部内に小論文委員会を設置した。目的は、現段階では個人的に希望した一部の生徒に限られている小論文指導を、3年生の全生徒を対象に行うということだった。だが実際にはその年は、委員会を作っただけで具体的な取り組みはできなままに終わってしまったという。

「それまでどこかに、S先生がやっていらっしゃるんだから、という甘えがあったと思います。でもS先生も小論文指導を行うことがかなりの負担になってきたらしく、悲鳴を上げ始めていました。まして小論文指導を全生徒を対象に行うとなると、1人の先生だけで担うには重労働すぎます。先生がみんな協力してやらないといけないということはわかっていまし



た

そんな時期の97年3月、S先生は異動されることになった。真瀬先生は、小論文指導を全校的なものにするために、いよいよ本腰を入れることにした。

**本年度は** 小論文指導を、いよいよ本格的にやっつけていきたいと思

います」

97年度最初の職員会議で、真瀬先生はほかの先生方に向かって、そんなふうに語った。指導体制を確立するためには、すべての先生方の協力が不可欠である。幸い、S先生が在任中にさまざまな成果を残してくれたこともあって、小論文指導に対して好意的な評価を示す先生方が少なくなかった。小論文対策が万全だったことで、東京大の後期日程試験に合格する生徒が現れていたことも追い風になった。

「なにか新しい提案をするときには、強引に物事を決めてはいけません。ほかの先生方も、かなり多忙な中で毎日を通して、すくなくね。時間をかけてゆっくりと理解してもらったことが大切です。私も今回の提案をするずっと以前から、生徒の考える力を深めるために小論文指導が有効であることを、先生方に話し

書かせるものもある。そこで、その生徒が志望する大学の入試問題と同傾向の課題に取り組みさせた。前半の基礎講座は128名が受講、後半の実戦指導は62名が指導を受けたという。

「生徒たちは最初、入試対策のためにいやいや受講している様子でした。文章を書くために頭を使うのは面倒くさいことですからね。でも、ある程度のもを書ける段階にまで

**教** 師全体の指導技術をいかに高めていくか。添削・教授法など、生徒の状況に合った指導体制の確立をめざしたいと考えている。



続けていました」

97年度の小論文指導は、具体的には以下のように行われた。指導対象となる生徒は3年生。希望者が参加し、5月から8月までが基礎講座で国語科の教師が担当。9月以降は実戦指導になり、各教科の教師に指導をお願いすることにした。

基礎講座は隔週1回、放課後などを使って行われた。生徒にはあらかじめ課題を設定して提出させ、講座では生徒の作品などを取り上げながら、主題の定め方、構成力、論理力、説得力、独創性のある文章の書き方などを指導した。

そして9月以降の実戦指導は、まさしく入試対策となった。公募制推薦入試受験希望者は9月より指導開始、私立大入試、国公立大前期日程試験は11月、後期日程試験は1月からの指導とした。ひと口に小論文といっても、大学により出題傾向はさまざま。長い資料を読み込んで書かなくてはならないものもあれば、テーマだけを提示し、



**小** 論文への取り組みは生徒にとっても決して楽ではなかった。しかし、ある程度書けるようになると、今度は生徒の方が乗ってきた。

つてくるんです。小論文を書く前にさまざまな文献を読み込んだり、文章も自分の意見を論理的に述べたものへと変わっていきます。今までの社会的なことに関心を持たなかった生徒が、成長するきっかけになっているんです」

本格的に小論文指導を行うに当たっては、国語科や進路部の教師だけでなく、ほかの科目の教師にも指導を要請した。これも「指導を全校的なものにするには、すべての先生の協力を仰ぐしかない」という考えによる。真瀬先生は後半の実戦指導を受け持つ各教科の先生に、基礎講座のテキストをあらかじめ渡し、先生方の不安を取り除いておいた。ほかの先生方に小論文指導の基本スタンスを理解してもらい、指導体制にズレが生じないようにするためのだ。

「実戦指導は、普段小論文指導には縁の遠い、数学や体育の先生にもお願いすることになりました。えっ、ホントに私がやるんですか、と驚かれた先生もいたようです。しかし、自ら小論文の参考書を買って求めるなど、積極的に取り組んでくれる先生も少なくなかったですね」

一般に入試の小論文は、高校の教科でいうと国語や地歴・公民、理科の分野が出題されることが多い。そのため数学や体育、家庭科などの先生が小論文を指導するときには、どつしても自分の専門外を扱わなくてはいけないことになる。その点に不安を持つ先生も多く、理解を得るのに若干の苦勞を要したという。しかし、小論文指導がどれだけ生徒たちに対して有効であるかは、実際にすべての先生に経験してもらっ

のが一番。真瀬先生は今後も粘り強く、協力を求めていくつもりである。

## 全校挙げての

不動岡高校の小論文指導体制は、今年2

年目を迎えている。最初の年を終えて真瀬先生は、いくつかの反省が出てきたという。

「小論文指導を組織的にやっつけていくという限り、教師全体の指導技術を高めていくことが必要になります。昨年はコツがつかめず、戸惑っている先生もいらっしやいました。小論文指導に対する考え方、添削の方法、教授方法などについて、教師同士で研修を行う機会を持ちたいですね。それも市販のマニュアルに沿って行うのではなく、生徒の状況に対応した本校オリジナルの指導体制を追求してみたいと思っています。もちろん、先生方の負担はできる限り少ないものにしなければいけません」

生徒からは、期間が短くてじっくりと小論文に取り組めなかったという批判も出された。基礎講座の開始時期を早めるなど、スケジュール面での再検討も行うつもりだ。

「生徒1人ひとりに、自分の未来を切り開くための力をつけさせるためには、低学年のころからの指導も重要です。今は3年生のみを対象としている小論文指導を、今後は1、2年生にも行っていきたいですね。また、ディベートを授業の中に取り入れるなどの新しい試みについても、関心を持っています」

不動岡高校の取り組みは、まだ今、最初の第1歩を踏み出したばかりだ。

**小論文の** 指導については、それまでは  
やっていた学年と違って、つまり  
1年生からずっとやっている場合もあれば、3  
年生になってから始める場合もあった。でも、3  
年からのスタートだとしても入試対策を目的  
にした受験指導だけに終わってしましますよ  
ね。私たちは小論文指導を通じて、生徒がいろ  
いろな情報を集め、分析し、自分の言葉で表現  
できるようになることも期待したいんです。で  
すから、進路指導としての小論文指導に学校く  
るのみで取り組むと考えると、

平成9年度、長崎県立長崎北高校では高校3か  
年を通じ、教師が教科の枠組みを越えて参加す  
る小論文指導がスタートした。10年前、長崎北  
高校に赴任して以来、進路指導の仕事に携わっ  
てきた森由刈先生は、「この高校の教科指導はほ  
ぼでき上がった。今度は小論文指導を本校なら  
ではの形に作り上げていきたい」と感じていた。  
「確かに、これまでも小論文指導の重要性に  
ついては、教師間でもある程度の共通認識はあ  
りましたが、『文章テクニクを磨くのが一番の  
目的なら、国語の先生がやればいい』という雰  
囲気が大勢を占めていたように思います。しか

た。もちろん、自己表現の術が生徒に身につけ  
ば、それは結果的に入試の小論文にも十分役立  
つはずだ。  
「本校ではこれまでも、1年生のうちから志望  
学部・学科別のグループ研究や読書指導、進路選  
択のガイダンスなど、いろいろな取り組みをやっ  
てきました。しかし、それでも自分の  
興味を把握できていない、ふざわしい  
進路を選んでいない生徒は出てきま  
す。そういう生徒にとって小論文がよ  
り自分を知るきっかけになれば、とい  
う思いがありました」（森先生）

**小**論文指導では個々の生徒  
への指導が不可欠であり、  
かなりの手間がかかる。教師、  
そして生徒の負担になりすぎな  
い工夫が必要になってくる。



## 長崎北高校

# 情報収集、 自己表現を3年間に 盛り込んだ指導



長崎県立長崎北高校  
森 由刈 Mori Yukari  
昭和27年長崎県生まれ。  
数学科担当。  
進路指導主事。  
平成元年に赴任以来、  
同校の進路指導に携わる。

し、本校がめざそうとしたのは、生徒に小論文  
を通じて自己を見つめさせ、表現させるといっ  
いば生徒の生き方にかかわる指導です。すべ  
ての教師が参加し、しかも1年次から継続して  
いくべき指導なのです。  
シフトホームルーム(SHR)などの場で連

**全校挙げての** 指導を確立するた  
め、教科、学年を横  
断した小論文指導委員会が発足し、初めて具体的  
な指導のための準備会が開かれたのは昨年の9月  
のことだ。学年主任、国語、地歴・公民、理科、  
家庭科の教科主任、そして各学年から選出された  
「小論文係」が、森先生を中心とする進路指導部  
主導の下、高校3か年の流れの中で具体的にどの  
ような小論文指導を行っていくかを討議した。

それまでの小論文指導は、3年生に対して、国  
語と一部の地歴・公民、理科の教師が行ってい  
た。1年生のうちから、全生徒に対して小論文指  
導を行うとすれば、特定の教科の教師だけでこ  
なしていくのは物理的に不可能だ。必然的に、す  
べての教科の教師の理解と協力が求められた。  
「小論文指導に消極的な先生も確かにいまし  
た。でも小論文指導ではなくても、どんな取り組  
みだっって最初から全員が一致するとは限りませ  
ん。なぜこの指導が必要なのか、理解を得るため  
に話し合っていました」（森先生）

また、最近の後期日程入試を中心とした小論文  
試験の広がり、その内容の多様性の面からも、  
国語科以外の教師の参加が望まれた。  
「委員会のメンバーに家庭科の先生に参加して  
もらったのは、環境問題や食糧問題といった、最  
近の家庭科の授業で重視される問題が小論文でよ  
く出されるからです。実際にどんなテーマで生徒  
に小論文を書かせるかは、それぞれの教科の専門  
家に意見を聞いた方がいからです。逆に、委員  
会の話し合いで自分の教科のどんなところが小論



長崎県立長崎北高校  
山口 麻子 Yamaguchi Masako  
昭和28年長崎県生まれ。  
国語科担当。  
同校に赴任して8年、  
小論文指導委員会の  
メンバー。

絡事項を伝えるのにもボソボソとしか話せず、  
面談でも自分の気持ちをきちんと相手に伝えら  
れない生徒たち。この生徒たちが少しでも自分  
をつまぐ表現できるようになれば、そして自分  
を語るためにももっと自分自身と社会全体に目  
を向けるようになれば……と、森先生は期待し

文のテーマになるかを再確認し、授業に生かし  
てもらったことも期待していました」（森先生）

**国語科以外の** 教師が小論文指導に  
携わる場合、「専門  
外の自分に本当に指導ができるのだろうか」と  
いう不安を抱くことが多い。だが、長崎北高校  
の教師には心強い成功体験があった。3年生を  
対象にした夏休みの学習合宿で生徒に小論文を  
書かせ、3年の学年団の教師全員が添削に挑戦  
していたのだ。このときはほかの教科の教師で  
も指導が行えるように、あらかじめ小論文を評  
価するうえでのポイントを解説したレジュメを  
すべての教師に配付した。

「資料文や統計・グラフなど、与えられた素材  
のポイントをつかんでいるか、筆者の意見に対し  
て論理的に反論しているか、独自の視点で建設的  
な意見が述べられているかなど、評価項目を明記  
し、初めての先生でも添削できるように配慮しま  
した。そして最終的な評価は採点する先生の主観  
的な判断にお任せしました」（森先生）  
小論文指導の重要性の認識を教師が共有し、  
さらに合宿での経験を糧にできたことで、教科  
学年を越えていろいろな教師が参加する下地が  
整った。

委員会で決まった指導の大まかな流れは、次  
のようなものだ。まず学年集会などを利用して  
各学年で小論文ガイダンスを実施、生徒に1年  
次からの小論文指導の目的を伝える。単に受験  
のためではなく、むしろ「生きていくための力」  
を養ったものであることを理解させないとい

「入試科目にないから自分には関係ない」という生徒が出てきてしまっただ。

そして、LHRや保護者会が開かれる日の午後など、授業以外の空き時間を見つけ、小論文用の教材を使って文章の組み立て方を指導したり、論旨要約などに取り組みせたりすることになった。どこまで進んだかのチェックは担任・副担任が受け持つ。

「一番の悩みは、小論文指導の時間をどうやって捻出するかです。また、生徒にも教師にも負担になりすぎたはいけません。小論文指導のため、教科指導が疎かになつては進学面で生徒の将来を保証できなくなりますから。また、学校独自で自前の教材を作成して、授業時間を使った指導を行うのは、教師にとっても現状では不可能です。あくまで無理をしないで、効果が期待できるやり方を心がけました」(森先生)

取り組みの成果は年に2回程度、小論文模試を実施し、見ていくことにした。これらをガイドラインとし、9年度は各学年において秋からできる範囲で指導を開始した。

「継続性を持って3年間の小論文指導を受けるのは昨年度の1年生からということになりました。ただ、2、3年生に対しての指導の成果、反

省は今後に生かしていけると思います。本校では3年生を担当した翌年は、1年生を受け持つことになっていきます。『新旧担任連絡会』などで各学年の課題は学校全体で共有化できるようになっているんです」(森先生)

**長崎北高校は** 以前から「書く」ことを大切にしている

学校であった。例えば、学級日誌には担任からの連絡事項を記入するページのほか、生徒自身がテーマを設定し、思ったことを書き込むページがある。ものを書くこと、公の場で語ることに苦手になってきた生徒にとって、月に1回は必ず回ってくる「自己表現、自己発見の場だが、そこには「書くことは自己発見」という言葉が刻まれている。生徒は日々の生活で感じたことを自由に書いていく。

このように、1年生のうちから数多く書かせる機会を持つことで、文章の組み立て方だけでなく、小論文を書くためには社会のいろいろなことを知っておかなければならないということ、つまり情報収集の必要性を生徒に感じさせることができる。

「小論文には、社会に目を向けて情報を収集する力、そして論理的に思考し、自分の考えを

持っているかがわかってくる。また、シヨートルームルーム(SHR)など、生徒とのコミュニケーションの場での話題作りにも役立つだ。

「ノート作りにあまり時間をかけすぎると困るのですが……。生徒なりに『こんなテーマが小論文の題材になりそうだ』と考えて記事を選んでいくようです。実際に文章力がよく伸びてきた生徒もいますよ」(山口先生)

しかし、すべての生徒がノート作りに積極的だったわけではない。そもそもどんなニュースを選び、どんな意見を書けばよいのかわからない生徒もいる。そこで山口先生たちは、月2回のペースで各学年の担任・副担任が交代で自分が関心を持った新聞記事の切り抜きを生徒に配布する「World Now 2000」を企画した。

「自分の担当教科に関連するテーマの記事を集める教師もいれば、自分の興味のある記事を幅広く集める教師もいますよ。小論文教材や対策ノートの添削、チェック、『World Now 2000』の作成など、教師の負担は決して軽いとはいえません。実際『World Now 2000』の場合、予定した回数の半分くらいしか発行できていません。小論文指導にはとにかくパワーがかかるものなんです」(山口先生)

それでも1年次から小論文指導をやっているという気持ちは変わらない。

「手間はかかるし、ぼつと生徒が変わるようなぼつとつきりした成果は見えにくい取り組みですよ。しかし、小論文指導は教科指導や生活指導など、本校のいろいろな指導の中の一部な

長崎北高校の「書くこと」の土台となっている学級日誌。自分で設定したテーマに基づいて、生徒の思いがスペースいっぱいにつづられている。



持てる力が必要です。そこで『小論文対策ノート』というスクラップブックを生徒1人ひとりに作らせました」

1年生の小論文係を務めた山口昌子先生は、小論文の「ネタ集め」となり、さらに生徒の目を社会に向けさせるためのしかけだと説明する。

のですから。ただ、少しずつではあるけれど、生徒が新聞を読むようになったとか、掃除の時間などに社会問題について生徒同士で話すようになったとか、そんな変化は感じています」(山口先生)

**世の中のじや**

「目を向けなければ、自分自身でなく、それどころか自分のこともよく考えていないのではないかと森先生、山口先生は最近の高校生に対してそんなふうに感じていた。センター試験が終わって「自分はどの大学・学部に進めばいいのかわからない」と相談を持ちかけてくる生徒。自分の興味に本当にマッチした学部・学科を選べない生徒。入試直前になって「自分がなにをしたいのかわからない」と悩む生徒について、担任と夜中の2時、3時まで話し合ったこともある。だから、自分と社会を見つめ、世の中を自分の興味・関心に引きつけて考える作業を、一連の小論文指導の中において生徒が自然にやっていくことになれば……という思いを抱いている。

「私たちの小論文指導がどんな効果を上げるのか？ 本当に成果が見えてくるのは、2年後、つまり3年間通して小論文指導を受けた今の1、2年生からかもしれません。また今後、教師間で意見を交わすことで、ある程度は取り組みのスリム化を図ることもあるでしょう。しかし、そうして長崎北高校ならではの指導スタイルが確立していくのだと思います」(森先生)

長崎北高校の生徒たちの3年間は、自己発見自己表現のチャンスであふれ始めたのだ。



生論文目録に動き始めるきっかけにもなっている。図書館で資料収集。生徒にとって、小論文目録への取り組みは社会情報収集に動き始めるきっかけにもなっている。